

第32回水郷水都全国会議・越前おおの大会

大会宣言

「第32回水郷水都全国会議・越前おおの大会」は、「“水”が生きるまちをめざして」をテーマに、2016年11月18日から20日にわたって、福井県大野市で開催されました。参加者は、延べ300人を数えました。

大会では、嘉田由紀子前滋賀県知事からの基調講演や全国各地からの報告を受けて、広く議論されました。地元大野市における住民と行政の協働による地下水保全の取り組みが参加者に深い感銘を与えた一方で、原発再稼働や沖縄基地問題、増加の兆しが見られる大型公共事業については、水環境への影響の懸念も表明されました。

岐阜県との境を水源とする「九頭竜川」は福井平野の水がめと位置づけられ、支流の「真名川」「清滝川」は、大野市の地下水涵養に大きく貢献する河川として市民の生活を支えています。

国内有数の多雨多雪地帯にある大野市の河川は、かつて豊富な水量を誇り、最上流部は美しい渓谷で、アユ、アマゴ、イワナが群れをなしていました。九頭竜川は、子どもたちが泳ぎ、メダカが泳ぐ「生きた川」でした。

市内には多くの湧水池があり、市民は豊富な地下水の恩恵に浴して暮らし、湧水文化の歴史を繋いできました。あちこちの川では、イトヨが泳いでいました。その水量と水質は、酒造りや醸造業、繊維産業等の発展と大野市の経済を支えてきました。

反面、九頭竜川は古くは「くずれ川」との異名を持ち、台風による洪水は地域住民の生活を脅かす存在でもありました。

昭和50年代の大型ダム建設により、大規模な洪水はなくなりましたが、地下水の水位は大きく低下してしまいました。

最上流のダムに蓄えられた河川水は、わずかな河川維持流量を除き、ほぼ全量が導水管で発電所と農業用水路に運ばれ、中流域でようやく河川に戻されます。

平成9年に「河川法」が改正され、環境維持用水として河川維持流量が増量されました。九頭竜川中流域は豊富な水量を誇り、魚道も再整備されて「さくらマス」の遡上も増えています。

しかし、ダム直下の河川状況は改善されず、美しい渓谷は戻っていません。水を失った川は、命をはぐくむ力を失ってしまいました。

“水”は自然の恵みであり、生きとし生けるものすべてが公平にその恩恵に浴するべきものです。この循環する自然の摂理を前提にした「水利用の見直し・水循環の回復と維持」が行われぬ限り、地球上の環境問題の解決は不可能です。

「第32回水郷水都全国会議・越前おおの大会」は、森・水・海は地域に生きるすべての生命体のものであり、環境保全に基づいた持続可能な社会の構築こそが人類に課せられた最大の責務であることを確認する大会でした。

ここに改めて、持続可能な社会の実現に向けて、ともに更なる一步を踏み出すことを宣言します。

2016年11月20日

第32回水郷水都全国会議・越前おおの大会参加者一同